

第25回

## 敬虔な家に育った私 パーティーの夜更け、短髪の彼女に迫られたキス

有料会員記事

ダックス〈仏南西部〉＝足田多揚 2022年1月21日 8時00分



2014年2月、同性婚を合法化する法律に反対するデモで掲げられた旗。父親と母親、子どもたちがあしらわれている。背後はパリのエッフェル塔＝ロイター。反対デモは13年5月に法律が施行された後も続いた

連載「それでも、あなたを」  
フランス 編①

連載「それでも、あなたを 愛は壁を超える」➔

民族、国家体制、偏見…。世界には、人と人とのつながりを阻む様々な「壁」があります。それでも出会い、固い絆で結ばれた2人がいます。壁を超える愛の物語をつむぎ、背後にある国際問題のリアルを伝えます。

その夜、食卓に並んでいたのはインゲン豆だったか、チーズにワインもあっただろうか。たぶん。

2010年7月。週末の暑い夜、22歳のマリークレマンは、フランス東部・ブルゴーニュ地方の実家を1人で訪れていた。

両親に、自分が抱えてきた秘密を「カミングアウト」するためだった。

「1、2、3……」。10まで数えたら切りだそう。頭の中で何度もカウントを繰り返した。でも、ダメだ。声が出ない。

何も切り出せないまま、息苦しい夕食が終わった。外の空気を求めて庭へ出た。

畑に囲まれた一軒家は、すでに夕闇が訪れていた。晴れた夜空へ、たばこの煙を吐き出した。

「どうかしたのか？」

振り返ると、パイプたばこをくわえた父がいた。

「何だかちょっとつらそうだったけど」と気遣った。いつもの穏やかな父がそこにいた。

「ねえパパ。私最近、オロールのことばかり話すけど、彼女、ただの友達じゃないの。それ以上なの」

言ってしまった。でもこれで「告白」になっているのか？ 闇夜に沈黙が訪れた。

父は落ち着いて答えた。「ママと、きっとそうじゃないかって思ってたよ。何かあるなって」

「わたし、パパとママに拒まれるんじゃないかって怖かったの」

「いいかい。親が子どもに望むこと、期待することはある。だけど、君の人生が僕が望んだものと違ったからといって、君を好きじゃなくなるわけじゃないよ」

その会話を、庭のドアの暗闇で、ネグリジェ姿の母が聞いていた。

マリークレマン스는気づいて近寄った。

だが、その顔は怒りと苦しみで引きつり、悲しみをたたえた目からは涙がこぼれていた。

「あなたは友情と愛情を取り違えているのよ」

何を説明しても無駄だった。「私にはわかる。あなたのことをよく知っているもの。あなたは同性愛者ではないわ」

2人の関係を「不潔」だと言い、オロールのことをいかつい男みtainな人物だとでも思い込んでいるようだった。

無理もない。自分がそれまで付き合っていたのは男性で、結婚するつもりだったのだから。

## 同性愛 はあり得ないこと

マリークレマンズが育ったのは裕福なカトリックの家庭だった。

兄に妹2人の4人きょうだい。母は専業主婦で、父親は原子力エネルギー庁の官僚。付き合い合う人々はみなカトリック信者だった。

日曜には必ず家族でミサに通い、週に何度かは食前に「アーメン」と祈りを捧げる。

夕食後には時折、自宅の祭壇前で一家でひざまずき、その日に感情が揺さぶられたできごとを静かに語り合った。

特に恋愛や性に対しては、極めて禁欲的だった。性的な話題は慎む。そして恋愛は生殖のためにすべきもの。それがカトリックの教えであり、家のルールでもあった。同性愛はあり得ないことだった。

加えて、マリークレマンズの家は、とりわけ厳格だった。子は親に従う。人に頼まれたらなるべく「ノン」と言わない。感情を表に出すのは控える――。

エゴを肯定し、自由に生きる今日のフランスではすっかり珍しくなった価値観を守る一家だった。

マリークレマンズが真剣に恋をしたのは16歳のころ。高校で出会ったジュリアンという同じ年の少年だった。

ミュージシャンを目指す奔放さもあったが、カトリック家庭に生まれ育ち、毎週ミサに通う「真面目さ」もあった。

教会では家族ぐるみで顔を合わせ、やがて「両家公認」の関係に。ジュリアンと結婚するのだろうと思っていた。

## ズボンをやめてスカートをはいた

付き合い5年が経ったころ。大学生になっていたマリークレマンズは、パリのテレビ局でインターン を始めた。

番組収録の観客を手配する仕事だった。

数日後、上司から「明日はオロールと仕事をしてもらおう。金髪の女性だ」と告げられた。

翌日、撮影現場へ向かうパリの地下鉄で、金色に染めた短髪の女性に目がとまった。ダウンジャケット姿でヘッドホンで何かを聴きながら、座席でぶっきらぼうな表情で物思いにふけていた。それが8歳年上のオロールだった。

「あなた醜い足しているわね」「でもあなたは美しい」などと言っただけのあけすけな性格。さすが仕事だろうと楽しければ朝の5時まで騒ぎ倒す奔放さ。オロールは自身が同性愛者だということも、隠さずに周りに告げていた。

一方、マリークレマンスはといえば、思ったことを口にしていいいわけではないと親から教わった。容姿というのは表面的なこと。嫌いな人でも人づきあいはする。夜10時には就寝する……。オロールはすべてが正反対だった。

幼少時にまとったよろいのような価値観を、少しずつ脱がしてくれるようだった。

「オロールに見つめられたい」と感じたのが始まりだった。

ズボンはやめてスカートをはいた。スニーカーはパンプスに。お化粧は女性っぽく。上半身は「セクシーな」服を。

「学生」から「女性」へと装いを変えた。

彼女の視線を身体に感じるようになった。

次第に、1日でも顔を合わさなければ不安になり、彼女からメールを受け取るたび、胸がときめいた。これは恋愛なのか？ 自分でもわからない。

一方で、ジュリアンとも週2、3回、会い続けていた。

## 一線を越える覚悟

09年2月。職場の同僚の男性、シルベールの誕生パーティーが開かれた。彼の自宅にオロールも招かれ、みんなで酒を飲み、歌い踊って夜を明かした。

夜が更け、オロールがいないことに気づいて探し回ると、シルベールの寝室にいた。暗闇の机でひとり物思いにふけていた。

悲しげな様子に、ドアをパタリと閉めて近寄った。

オロールは自分の両腕を取って引き寄せ、首元に口づけした。そのままゆっくりと、その唇をのどから口元へとつたわせた。

唇へ迫ったころ、オロールをはねのけていた。「あなたが必要なのは私じゃない」。そう言って、荷物をまとめて自宅に帰ってしまった。

感情と行動があべこべだった。今や彼女に恋をしているのは明白だった。でも、そんな現実を受け入れていいのか、混乱していた。

数日後、オロールとパリ北駅前のカフェで話し合った。

真夜中のカフェのテレビ画面は、ラグビーの試合を流していた。

「あなたはどうしたいわけ？」

そう問われ、「キスしてほしいの。1回だけ。よく考えたの」。

すると、ビールを飲んでいたオロールは「口づけは1回だけするものじゃない。するならずっとよ」と拒んだ。

一線を越える覚悟が自分にあるのか。そう迫っていた。(敬称略)(ダックス〈仏南西部〉＝疋田多揚)

---

続きはこちら)【フランス編②】背中押した友の自死 彼氏と別れて見つけた、彼女との居場所 →

---

【動画】「それでも、あなたを」フランス編

---

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.